

一九七七年十月

踏切が鳴って私は足を止めた。運がないな。

轟音はゆっくり近づいてくる。石炭で一杯の貨車を引き連れて、くすんだ赤の機関車が山の上から下りてくる。

文句をつけても仕方ない。これから行く先なんて、その総本山のようなものだから。

小柳津家のことは、この羽内の町に住む者なら誰もが知ってる。

羽内炭鉱。この北国の町で、唯一にして絶対の産業。それを運営しているのが、小柳津家が支配する羽内炭礦社だ。

小柳津美黎。彼女はその跡継ぎと目される、今となっては一人娘——前には上に二人男の子もいたけど、事故と病気でどっちも死んでしまった。

そして、彼女は私の小学校の同級生でもあった。中学校からは札幌の某お嬢様学校へ行ってしまったのだが、高校を出る今度の春には羽内に戻って来るらしく。

その際に彼女につき使用人を募集しており——たまたま『できれば地元がいいな』なんて安易な気持ちで就職先を探していた私は、物珍しさにも釣られてさっくり飛びついたって話で。そういうことで私は今、その美黎さんの使用人になれるかどうかの面接を受けに行くところなのですが——そして、できれば受かってしまうと色々気が楽なのですが。

……さて、美黎さんは小学生の時どんな子だったっけか。

一回二回同じクラスになったのは覚えてる。

髪の毛は長かった気がする。いつもクラスで一番可愛い、都会のお嬢さんみたいな服を着ていた気がする。じゃあ男の子にいじめられてたかっていうと、そんなでもなかった気がする。かといって女の子と仲が良くなるような立ち回りしてた印象もない。クラスでは普通の子だったのかな——それもなんか違った気がするし。いまい思い出せない。

まあ、思い出せたとこでこれからの面接の役に立つかと言えばすごく微妙——なんせ小学校出てから五年半も経ってる。おまけにこっちがこんな山の中のうのと過ごしてる間、向こうはお嬢様学校で揉まれてきてるし、どんな風に育ってるやらわかつたもんじゃない。

ようやく全ての貨車が通り過ぎ、踏切の音が鳴り止んだ。緩やかに上り坂を歩き出してふと気づく。

こんなに街の上の方まで来るのは、初めてかも——。

*

一番上に瓦の乗った、長く続く立派な土塀。

その内側には、目隠しか雪除けなのか立派に育った細長い針葉樹の森。

呼び鈴がでつかいベルとかだつたらどうしようかと思つたけれど、幸い今をときめくインターホン。

五十代ぐらいだろうか、品の良い感じの和服の女中さんが出てきて千代と名乗る。

林の向こうに見えていた煉瓦造りの洋館へと案内される。その間がやたら長く感じたのは、緊張してたのもあるけど、建物が思つた